

## コロナ自粛期間中でも本物に触れる体験を

### ～「みんなのみ～つけた！」事例紹介～

秀瀬みのり\*

#### 要旨

新型コロナウイルス感染拡大と高槻市からの要請を受けて、高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）は2020年3月3日から5月22日まで臨時休館となった。全国の博物館がインターネットを活用したオンラインの企画を活発に展開していく中、あえてオンラインではない企画を実施した。あくあびあの利用者は小さな子ども連れの親子や高齢者が多いことから、利用者層に合わせた事業展開が必要と考え、本企画に至った。館のスローガンにある「高槻の自然」とは身近な自然そのものを指し、きっかけさえあればだれでも見つけることができる。来館はできなくても身近にある「本物」の自然に触れ、博物館スタッフとのやりとりで興味をのばす経験はできると考え、あくあびあの部活プロジェクト「あくび・くらぶ」を活用し、「本物」に出会う体験ができる企画「みんなのみ～つけた！」を郵便で届けた。館の活動が利用者の生活に寄り添うことで、博物館や自然を「日常」として感じてもらうことを目指したい。

#### キーワード

新型コロナ イベント 自然 子ども向け オンラインではない

#### はじめに

高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）（以下あくあびあ）は大阪府高槻市の中央部に位置する自然系博物館である。建物は残存緑地に立地し、高槻市内を縦断する芥川が隣接する。館の東側はのどかな風景が広がる旧集落があり、西側は新興住宅地が造成されている。あくあびあはこの両方の「地域の交流拠点」を目的に1994年に高槻市が「芥川緑地資料館」として開館した。開館当初は高槻市が直営で運営していたが、2009年からは特定非営利活動法人大阪自然史センターとNPO法人芥川倶楽部で構成される「あくあびあ芥川共同活動体」が指定管理者となり、「高槻の自然がわかるみんなの博物館」をスローガンに掲げて運営している。

館内は「芥川のいきもの」「高槻のいきもの」のテーマ展示の他、図書コーナーや遊んで学べるハンズオン展示がある。普及事業では、季節に応じた自然観察会や講座、子どもワークショップや乳幼児向けのおはなし会など、年齢問わずさまざまな人に参加してもらえる企画を開催している。利用者は小学生以下の子ども連れの家族

が多い<sup>(1)</sup>。

2016年には「あくあびあ部活動プロジェクト」（以下部活）をスタートさせた。スタッフや市民が発起人となり活動テーマに関心のある人を集めて、あくあびあのヒト（学芸員や研究員）、モノ（標本や資料）、場所を利用しながら、それぞれの目的を充実させるため自由に活動でき、現在11部が活動している。標本作成、鳥類調査、川のそうじ、あくあびあのファンクラブ…など活動の種類は幅広い。

#### 活動自粛中のあくあびあ

新型コロナウイルス感染拡大と高槻市からの要請を受けて、あくあびあは2020年3月3日から5月22日まで臨時休館となった。休館中、スタッフは出勤と在宅勤務で調整しながら業務を続けた。業務内容は、たまっていた標本作成や整理、常設展の更新、館内外の施設整備などやることはたくさんあったが、一番の気がかりはあくあびあの利用者のことだった。土日祝日は市外からの利用者が増え混み合うこともあるが、平日は毎日のように散

\*高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）

歩に来る親子や高齢者がゆったりと見学して過ごしている。この休館中、あくあびあに来ることができなくなった人たちは何を思い、どうしているだろうか。開館できず、人と顔を合わせることが難しくなった状況下で、私たちに何ができるのか考えた。

あくあびあが立地する緑地公園は、自粛期間中でも散歩する人は少なくはなかった。あくあびあの4階入口の前にはコイが泳ぐ池があり、開館中はミュージアムショップでエサを購入してエサやりができる。これが子ども連れの利用者に人気で、休日はエサが売り切れることもある。そのため自粛期間中は、入館はできないが公園に遊びにきた人にコイのエサやりだけでも楽しんでもらおうと無人販売を始めたところ、毎日必ず売り上げがあった。このことから、周囲の緑地公園で過ごしている人は緊急事態宣言下でもいることがわかった。

前述したあくあびあの部活の中には「あくび・くらぶ」というグループがある。活動内容は自宅に郵送される会報誌「あくび・くらぶ」を読んで、あくあびあを楽しむことである。会報誌には学芸員のコラムやイベントなどの最新情報を掲載し、登録会員にはイベントによく参加するリピーターも多い。このことからあくあびあの「ファン」であり身近な利用者でもある「あくび・くらぶ」会員に向けた取り組みとして、臨時休館中に会報誌特別号を発行し、企画「みんなのみ〜つけた!」を告知した。

## 企画「みんなのみ〜つけた!」

臨時休館中、学校は臨時休校、外出自粛を要請され、大人も子どもも家にいる時間が長くなった。博物館では臨時休館や感染拡大防止のため開催できなかったイベントなどを新しい試みとしてオンラインで配信したり、全国の博物館が自館の教育普及ツールを持ち寄って、自宅にいながら博物館の学びを楽しく体験できる「おうちミュージアム」など博物館活動のデジタル化が進んだ<sup>(2)(3)(4)</sup>。

あくあびあでもブログやSNSの活用、YouTubeへの動画配信を増やす取り組みをしたが、これらのツールの利用者層とあくあびあの利用者層が一致しているとはいい難かった。周囲の子どもがいる家庭に話を聞いたところ「家でずっとごろごろして、インターネットばかりしているのが心配」「小さな子どもにテレビやネットの動

画はできれば見せたくない」という声もあった。地域博物館では地域の身近な利用者の声は、博物館活動を展開するためのヒントとなる。そして同じ地域で生きる仲間として一緒に解決すべきことが含まれる場合がある。

SNS等の利用者層と当館の利用者層を比較した結果、インターネットの動画や情報を充実させるより、あえてアナログ的なアプローチの方が効果的との結論に至った。博物館は「本物と出会う」場所である。博物館に行けないのならば、本物に出会うためのしかけ作りをしようと発案したのが本企画であった。

目的は、参加者に①身近な自然に気づいてもらう②手紙のやりとりを通じてあくあびあを身近に感じてもらうこととした。家にいることにストレスを抱えている人が多いという意見を聞いたので、博物館に来なくても自然観察ができるきっかけを作りたかった。実施時は4月中旬で、多くの生物が活動を始める良い季節だったこともあり、参加者や展示を見た人に、生物を通じて春の季節を感じてもらいたいという思いもあった。詳しい流れは以下の通りである。

① 自宅の周りにお気に入りの生きもの（自然）の絵や写真、いつ、どこで、何を見たか、選んだ理由をワークシートに記入する。

ワークシートの体裁は小学校低学年がわかるようにかんたんな言葉で作成し、子どもから大人まで参加できるように意識した(図1)。ワークシートは1人5枚までコピー可とした。

2020年度 あくあびあ特別企画  
みんなのみ〜つけた!  
これは \_\_\_\_\_  
えらんだ理由 \_\_\_\_\_  
ばしょ \_\_\_\_\_  
日にち 月 日 年

【図1】「みんなのみ〜つけた!」ワークシート

② 記入したワークシートを参加者があくあびあに郵送する。

郵送にすることで、手紙を書いて郵便に出すという体験になる。子どもによっては初めての体験になることも予想され、教育的な要素を意識した。

③ あくあびあからお礼のハガキが届く。

記入されたワークシートが館に届いたら、報告された生物について学芸員や研究員がコメントを手書きしてハガキで返信した。コメント内容は報告してくれた生物についての知識や観察ポイントなどフィードバックするような内容を心掛け、生物への興味をさらに持ってもらえるようにした。ワークシートをただ送るだけでなく、あくあびあのスタッフと友達のように手紙のやりとりをすることも楽しんでもらいたいと思った。使用したハガキはマープリング(墨流し)の手作りハガキを作成した(図2)。



【図2】参加者に送ったあくあびあからの手作りハガキ



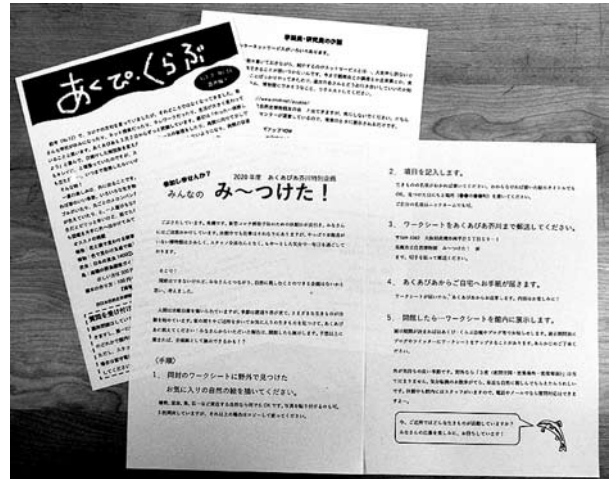
【図3】子どもワークショップでマープリング(墨流し)のプログラムをしているところ

マープリングはあくあびあの子どもワークショップに登場する定番のプログラムであったので、ワークショップに参加したことがある人がこのハガキを見て思い出してくれることを期待した(図3)。

④ 参加者のワークシートを館内に展示する。

参加者のワークシートは開館後、予定の枚数が集まりしだい展示することになっていた。展示することを告知することで参加者が来館する機会を作ることができること、さらにこれらの報告を集めることで「2020年春にみつけた生物」というテーマ展示の開催を企画していた。館内に展示することで、本企画に参加していない利用者にも見てもらうことができ、普及事業を紹介することも狙いとしていた。

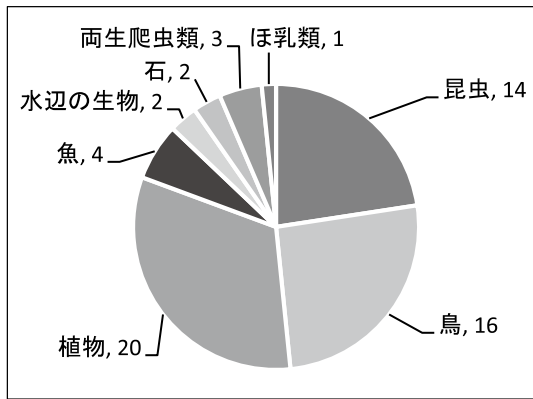
広報は2通り、①あくあびあ・くらぶ会員には会報誌郵送時に同封(図4)、②ブログとツイッターで告知し、ワークシートをダウンロードできるようにした。展示する時期が決まれば、ブログやツイッター、会報誌でお知らせするとした。



【図4】企画「みんなのみ〜つけた!」告知と会報誌

### 参加者の様子

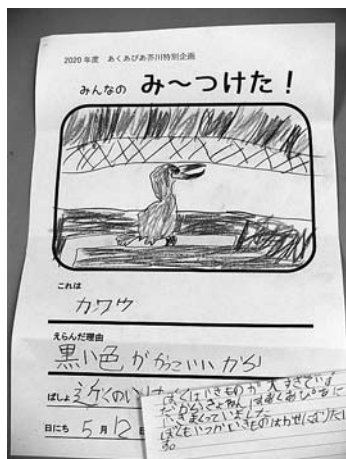
2020年4月20日から6月14日の56日間に26人、59枚の参加があり、第1号は4月24日に届いた。市内在住の参加がほとんどだったが、市外からの参加も少数あった。ワークシートをコピーして数枚送ってくる人が多く、館の郵便ポストに直接投函してきた人もいた。大人の参加は1人のみ、他は全て子どもだった。内容は植物、昆虫、鳥が多く、確認場所は自宅の庭(花壇、



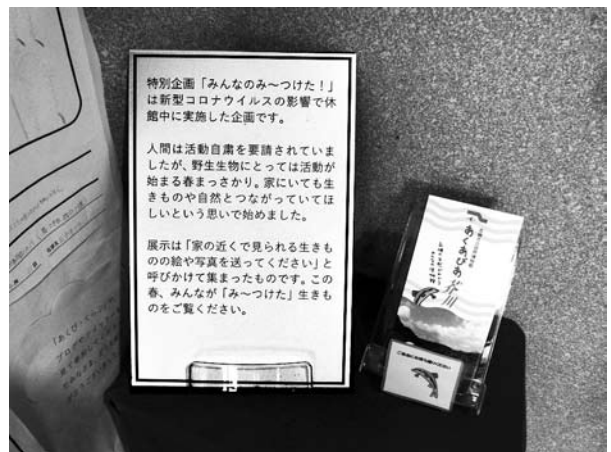
【図5】ワークシートに描かれた生物(自然)の内訳



【図7】展示の様子



【図6】参加者から送られてきたワークシートとメッセージ



【図8】見学者に向けた展示解説文

植木鉢を含む)、近くの公園が多いようだった(図5)。記入したワークシートと共にあくあびあに対する励ましのメッセージを入れてくれる人も数人いた(図6)。あくび・くらぶ会員による参加が大半で、ブログやツイッターを見て参加した人はなかったが、市内在住の大人の参加者が沖縄に住むに親戚にこの企画を紹介してくれたことで、あくび・くらぶ会員ではない遠方に住む参加者から沖縄の生物の報告が届くという思いがけない反応もあった。

送ってもらったワークシートは6月14日から展示として、1階ジオラマ水槽横でスタートした(図7)(図8)。自分のワークシートが展示されていることを楽しみに来館した人が何人も見られた。臨時休館中に一度郵送し、開館してから再度ワークシートを直接館へ持参するケースもよく見られた。ワークシートを書いて送るだけでなく、開館後に来館してくれたことでワークシートに描いてくれた生きもののお話や自粛中の出来事などについて、直接顔を見て話をする機会を持つことでも

きた。来館できない期間でも生物や自然への興味を絶やさず、あくあびあを身近に感じてくれていたのではないだろうか。

### 最後に

インターネットが普及し、ほしい情報がその場で手に入る便利な時代であっても、パソコンやスマートフォンの操作ができない人や、楽しいネット動画やテレビを見せるより小さな子どもに実体験をさせたい保護者は存在している。あくあびあの利用者は小さな子ども連れの親子や高齢者が多いことから、利用者層に合わせた事業展開が必要と考え、本企画に至った。館のスローガンにある「高槻の自然」とは身近な自然そのものを指し、きっかけさえあればだれでも見つけることができる。館の活動が利用者の生活に寄り添うことで、博物館や自然を「日常」として感じてもらうことができれば、こんなに嬉しいことはない。来館制限やハンズオン展示の撤去、イベント開催についても難しい状

況が続いているが、自然博物館として身近にある本物の自然を伝え続けることは変わらない。「本物」を感じ

てもらった体験をどのように届けるか…、試行錯誤する日々はまだまだ続くだろう。

#### 【引用文献・参考資料】

- (1) 五月女草子 (2018). 自然と博物館にふれる最初の一步～自然博物館における乳幼児向け催し「おはなし会」の紹介～. *Musa 博物館学芸員課程年報*. No.32. p.21-25
- (2) 高尾戸美・鬼本佳代子 (2020). SNS ネットワークが拓く、コロナ禍の困難を乗り越える可能性. *Musée*. Vol.126. p.12-15
- (3) 福田和浩 (2020). コロナ禍で変わった小さな博物館の活動について～しおんじやま古墳学習館のオンライン事始め～. *Musée*. Vol.126. p.27-31
- (4) 可見光生 (2020). コロナ感染拡大防止休館中のできごと—休館中ですが、「やっています」より—. *Musée*. Vol.126. p.32